

第7回 英国サウス・ダウنز国立公園設置の動き

1 新しいサウス・ダウنز国立公園の設置決定

2009年3月31日、英国環境食料農村省のヒラリー・ベン大臣は、サウス・ダウنز地区を新たに国立公園に指定することを発表した。

サウス・ダウنزは、英国の南側、英仏海峡近くに東西に広がる石灰質の土地が作る丘陵地帯である。その東端の英仏海峡に面して白亜の石灰岩の絶壁が並ぶセブンシスターズは、映画やコマーシャルによく使われる名所であり、写真を見たことのある方も多であろう。



白い絶壁が連なるセブンシスターズ

一方、ロンドンから南に1時間弱という便利な場所にあり、また、英国の中では気候が温暖なこともあって、サウス・ダウنزの南側、海沿いにはブライトンを始めとして大小の町や住宅地が続く。サウス・ダウنز自体は多くが農用地として使われているが、ロンドン近郊やこれらの海沿いの町に住む人々が散策を楽しむ人気のエリアであり、地域内には数多くの散策路が設置されている。



サウス・ダウンズの丘陵と農村。

英国には現在 13 の国立公園があり、サウス・ダウンズは 14 番目の国立公園となることになる。実は、英国で国立公園設置のために 1947 年に最初の 12 の候補地が示されたとき、サウス・ダウンズはその 12 の地区の中に含まれていた。その後、他の 11 の地区は順次国立公園化されていったが、候補となってから 60 年を経て、ここだけは唯一国立公園化されていなかったのである。

サウス・ダウンズは確かに独特の地形とそれによる美しい景観を提供しているが、多くの部分はすでに集約的な農業活動の対象となっており、国立公園として提供すべき人々へのレクリエーションの機能が不十分、というのが、国立公園化されなかった理由であった。国立公園とするかわりに、この地域の多くは環境保護政策の一環である特別景観地域に指定され、農業政策でも「環境に対し特に対応が必要な地域」(ESA) に指定されることで、環境の保全が図られてきた。

しかし、その後英国での国立公園の機能も変化する中で再評価がなされ、サウス・ダウンズに縦横に走るフットパス（散策路）の存在などにより、今回国立公園化が決定された。もちろん、決定に至るまでには、国による住民などからの意見募集や国立公園化を支持する関係団体のキャンペーンなど、さまざまな動きがあった。国民からの意見募集では、国立公園化については高い支持を得ている。国立公園化が決定した現在、国立公園の境界を最終的に決めるための意見募集や、サウス・ダウンズ国立公園管理組織の設立のための準備が進め

られている。前述したように、この地域は人口の大きな町も隣接し、国立公園対象地域内の人口は他の国立公園に比べて圧倒的に多く、含まれる自治体の数も多い。従って関連団体との調整も大変なようだが、2010年4月には仮の国立公園管理母体の設置、2011年4月には国立公園としての運営の開始というスケジュールとなっている。

国立公園化することによって、大きく変わるのは、これまで自治体が担っていた土地利用計画・許可の権限が、国立公園管理組織という国の機関に移行することである。英国では農地も含めて開発規制は厳しく、農地の真ん中に住宅地やショッピングセンターが建つようなことは起こらない。土地利用計画は県や市町村が作り、個々の住宅の建設までもが計画に沿っているかを厳しく審査される。それでも、国立公園管理組織に土地利用許可の権限が移れば、例えば、地元で期待されている主要道の拡張ができなくなるのではないか、といった懸念が出されている。

また、国立公園管理組織は、国の別の機関が担っていた農地などの環境保全や、人々への自然環境に関する知識の普及などを担うことになる。

2 国立公園化の意義と農業

国立公園化することで、この地域の農業はどのような影響を受けるのだろうか。

環境保護政策を実施する国の機関であり国立公園化の作業の多くを担うナチュラル・イングランドの担当者は、国立公園化することは、そこでの経済活動を凍結するものではない、と述べる。現にサウス・ダウンズの85%は農用地として使われており、石灰質特有の植生による草地の広がるサウス・ダウンズの景観自体が農業活動の成果でもある。その景観の保全に寄与する農業活動は、維持されなくてはならない。

しかし、一方、住民からの意見募集で多かったのは、農業への懸念である。もともと草地としての利用が多かったサウス・ダウンズだが、戦後の農業の集約化の中で耕作して穀物を生産することが増え、農用地の半分以上は耕地となっている。耕作は石灰質の地層を壊し、独特の景観や石灰質土壌特有の生態系を破壊する。農業によるこれ以上の環境破壊を抑え、サウス・ダウンズ特有の草地を維持することへの住民の関心は高い。



穀物生産に利用されているサウス・ダウンズ。

逆に、英国の農業団体（ナショナル・ファーマーズ・ユニオン）は、今まで農業と環境保全とを両立させるためのさまざまな政策が実施されてきた中で新たな管理体制・機関の設置は無駄であると、サウス・ダウンズの国立公園化に対して反対の立場をとり続けてきた。国立公園化が決定した後は、現在の近代的で商業的な農業がきちんと継続できるよう、国立公園の運営に農業者代表を十分に参画させるべきであると主張している。

農業環境政策の担当でもあるナチュラル・イングランドは、既存の農業環境政策である環境管理事業のうち、環境価値の高い地域を対象に高度な取組を求める「高度事業」を、この地域で集中的に実施する体制をとっている。担当者は「穀物生産者が、穀物のみではなく、畜産も含めた混合農業に転換することが理想だ」と語り、実際、新たに畜産を導入する際に必要なフェンスの設置などは助成対象となっている。また、動物が移動できるように自然価値の高い草地や林地を線的に配置するような取組を、高度事業に参加する農業者とともに進めている。国立公園管理組織が機能し始めれば、そこと連携して地域の環境価値の保全と増進を図っていくとのことだった。

最後に、農業者の感想を聞いた。サウス・ダウンズ地区のすぐ外側で農業を営むこの農業者は、国立公園化により国が土地利用などを管理するようになり、柔軟性がなくなるのではと述べていた。国立公園地域内は開発がより困難になるので、その外側の地域の地価の上昇が見込まれる一方、農家民宿などを営む農業者は、国立公園地域内に含まれることを期待しているとのことだった。

サウス・ダウンズの国立公園化は、すでに開発が進み人口も多い地域に新たに国立公園を設けるといふ、他ではあまり見られない動きである。地域全体を、環境保全という視点で新たに網をかけて管理することで地域の経済やとりわけ農業にどのような影響が出てくるのか、今後も成り行きを見ていきたいと考えている。



サウス・ダウンズの放牧風景と散策路を歩く人々